

茶の湯文化学会会報 No.20

第20号 / 1999年2月26日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

論 茶 絶 句

中国・陸羽茶道館館長 歐陽勲

緑茶慢品

悠悠清遠緑茶香 嫋嫋茶煙溢四方

瞑目沈思心更爽 一天不覺又斜陽

緑茶をじっくりと含味する

悠悠として清々しい緑茶の香り

嫋嫋たる茶煙は四方に溢れる

目を閉じて沈思すると心は更に爽やかで

いつのまにか日が傾いてきた

劍春茶

壮志酬於三尺劍 緑芽十片火前春

啜多思爽都忘寐 草木英華信有神

劍春茶

壮志は三尺の劍に酬いられ

緑芽十片火前の春

多く啜ると気分爽快で寝ることを忘れてしまう

草木英華に奇效のあることがわかる

詠仙人掌茶

品高李白仙人掌 茶似蓮花生万象

雅淡清香滋味醇 回甘雋永怡神爽

仙人掌茶を詠ずる

品の良い李白仙人掌茶

蓮花のように万象を生ず

淡く清らかな香り、醇乎たる味

後口は甘くすぐれ心がなごみさわやかになる

後の尾字を合わせると、「劍春」という茶名になる。

②草木英華はここでは茶葉を指す。信有神は茶に靈妙な効果のあることがわかるという意味である。劍春茶の原料は一芽に一・二の新葉つきの茶葉を基準とする。製品はまるで劍のような形をしており、翠緑で光沢がある。味は濃くて甘い。湯色はすがすがしい若草色。

注①劍春茶は鄂南劍春ともいう。有名な鄂南茶區の咸寧浮山製茶所で造られている。右の詩は唐・宋の詩人の名句からなっている。第一句は唐の李頎の句で、第二句は唐の白居易の句で、第三句は北宋の趙抃の句で、第四句は北宋の曾鞏の句である。第一句と第二句の最

注①仙人掌茶はまた、玉泉仙人掌ともいう。湖北省当陽市玉泉山麓の玉泉寺の辺で造られた扁形の蒸青緑茶である。唐代に玉泉寺の中孚禪師(俗姓は李という。詩人の李白の甥)によって最初に造られた。唐肅宗上元元年(七六〇年)に中孚禪師は江南に漫遊し、金陵(現在の南京市)で李白に会った時、この茶を贈り物とした。

李白は味わったあと、茶葉が手の掌のような形をしているところから、「仙人掌茶」と名付け、賛嘆の余り詩を賦し序を作った。②第一句は、清代の李調元の『井蛙雜記』にある。③第二句は、湯をついだあと、仙人掌茶の芽と葉がのび広がって、清らかな緑色で、たくさん蓮花が水中に挺立しているようであるのを詠じたものである。

径山茶

両泉輝映径山茶 織秀芽峰放玉華
香氣清幽鮮爽里 天然絕品留煙霞

径山茶

両泉に輝く径山茶

細くてしなやかな芽から玉のような泡が立つ

香氣は清らかに仄かに爽やかに立ちのぼり

天然の絶品は煙霞を魅了する

注①径山茶は浙江省余杭の径山に産する長い歴史を持つ銘茶で、径山香茗ともいう。②両泉は径山の龍井泉と金鷄泉をさす。

讚姜茶飲方

蔗糖伴入姜茶湯 茶助陰寒姜助陽
一熱一寒平調好 無窮回味送清香

姜茶飲方を讀める

蔗糖をしょうが茶に混ぜると

茶は陰を益し、しょうがは陽を益す

熱と寒がよく調和し

清々しい香りは窮まるどころが無い

注①姜茶飲方は実は昔の加味茶の一種である。中国では加味茶は種類も多く、歴史も長い。その薬効を論じる著書も浩瀚である。ここに一つの故事を紹介しよう。明末清初、民族の英雄である鄭成功は台湾を奪回するため、福建省の閩南に兵を駐屯させた。ところが、閩の氣候は炎熱で山地には霧の害があり、伝染病が年中はやっていて、その氣候風土にあわない将士達は下痢を患ってしまった。この時、閩南出身のある軍医が当地に産する茶葉と姜に蔗糖を混ぜて煎じて将士に飲ませた。すると、まもなく病気がなおった。薬理的に説明すれば茶が陰を助け、姜が陽を助け蔗糖が毒を消し、寒と熱、陰と陽が調和して療病に顕著な効果をあらわしたのである。以降「姜茶飲方」は有名になった。最近、『金瓶梅』を讀んだら、よく加味茶のことが出てくる。そこで茶に加えられるのは羅漢果、新鮮な核桃、銀杏、橄欖の実、栗、青豆、茉莉、新鮮な竹の子、菊花、はまなす、生姜などである。

蒙頂甘露

終年細雨潤蒙山 甘露名茶奪桂冠

湯碧微黃滋味爽 芬芳鮮嫩久回甘

蒙頂甘露

年中細雨は蒙山を潤おし

甘露の名茶は桂冠を奪う

湯色はわずかに黄味をおびた碧、滋味が爽やか

芳しい香りがみなぎり、後味はいつまでも甘く

長い

注①蒙頂甘露は四川省の名山・雅安両県に跨る蒙山に産す。蒙頂甘露の文字の初見は明の嘉靖二十年（一五四一年）である。宋代に蒙山茶區で作った「玉葉長春」と「万春銀針」をもとにして作られたのである。

白牡丹

白茶芽好形如花 冲泡葉舒托嫩芽
宛若初芽香倍蕾 夏天佳飲最堪夸

白牡丹

白茶は芽が好く形は花の如く

湯を注ぐと葉はのび広がって柔かい芽を受け

まるで開いたばかりの芳しい蕾

夏の日のおいしい飲み味はこの上もなくすばらしい

注①白牡丹は白茶類に属する。福建省の特産である。二枚の緑葉の中に銀色の白毫芽をは

相合相諧経百篇 氣呑万象沁心扉

茶韻

山川の靈氣からかぐわしい香りを得る

淡泊にして天然、韻味は長くつづく

百篇と相和し相諧し

氣は万象を呑み心に沁みる

注①茶韻を味わうには、茶の香りは山川靈氣によることを知らなくてはいけない。故にわれわれ人間も、茶のようにおのれを虚にして百篇を吸い、氣は万象を呑んで、自然と人間との相和相諧を求め、人生の目標とすべきである。

陸羽の故郷である中国湖北省天門市に、陸羽研究会という団体があり、機関誌を發行するなど活発に活動している。その会の常務副会長の任にあり、また同地の陸羽茶道館の館長でもある歐陽勲さんは、詩・書・画にも長じ、天門市書画芸術研究会の会長をも兼ねる。湖北省きつての文人である。その歐さんからこの程、茶に関する自作の詩「論茶絶句」百首が寄せられた。その中から九首を抄出して掲げ、日本語の意識をつけた。注は王さんの自注をやや簡略にして日本語訳したものである。なお訳は張建立さんによる。（倉澤行洋）

平成十年度茶の湯文化学会の大会が、十月十八日午後一時より、ホリデイ・イン京都で開催された。十月とは思えない暖かな陽気のもと八十八名の参加を得た。

中村昌生会長の挨拶のあと、船阪富美子氏「館柳湾の漢詩に見る煎茶」、中村順行氏「茶の品種育成と普及動向」、横内茂氏「小堀遠州茶会記」に見る遠州の茶花」、休憩を挟んで伊藤嘉章氏「美濃古窯文書に見る桃山江戸の茶陶」、仲隆裕氏「近世初頭の数寄屋と庭園一廻遊式庭園の成立に関する一考察」の五本の研究発表があった。最後に三崎義泉氏より「茶の湯における「しぜん」と「しねん」という題で記念講演が行なわれた。

記念講演のあと、別室に移り懇親会が催され、和やかなひとときを過ごした。

なお、前日の十七日には茶道資料館で開催中の「交趾香合」展の見学会を、同館のご厚意により実施することができた。

各発表の要旨は次の通り。

館柳湾の漢詩にみる煎茶

さんで花のような形をしており、湯を注ぐと緑葉の上に若芽ののり、まるでつぼみが開いたばかりのようであるので白牡丹と名付けられた。福建省政和で造られた白牡丹は主にホンコン、マカオ、東南アジア方面に輸出している。熱射病に効くので、夏日の飲物としてたいへんよい。

品莫干黄芽

一品黄芽喜欲狂 清幽香氣沁心扉

茶分四品三経探 無愧名茶伝四方

莫干黄芽を味見する

まず黄芽を味わうと喜びに狂うほどになり

清幽の香氣が心にしみる

茶は四品に分け、三度採む

名茶として文句無く、四方に伝わる

注①莫干黄芽は浙江省徳清県の県境にある莫干山に産する。茶を摘む季節によって莫干黄芽を四品に分ける。清明の前後に採んだのは「芽茶」と称し、夏の初頃に採んだのは「梅尖」と称し、秋に採んだのは「秋白」と称し、陰曆十月に採んだのは「小春」と称する（十月を小陽春という）。

茶韻

山川靈氣得芬芳 淡泊天然韻味長

【研究目的】煎茶の祖といわれる売茶翁(二六五)―(二七三)の著書『梅山種茶譜略』(二七四)は、次の言葉で始まる。「それ茶は、神農より以来その来ること尚し。唐に至りて、陸羽経を著し、盧仝歌を作りて、茶事海内に布く。爾來風騷の士、詩賦若しくは譜を造りて、茶を賞せずと云うこと無し」。このように、中国において、茶と漢詩は、風流韻事を事とする文人にとって不可分のものであった。日本においても、近世中頃から煎茶が広まるにしたがって、文人たちは煎茶を詠んだ漢詩を多く作ってきたが、煎茶書に比べると、一部の例外を除いて、その姿は断片的にしか紹介されてこなかった。しかしながら、煎茶に対する文人の想いを知る手がかりとしては、これほど有用なものはないだろう。そこでその一例として江戸の漢詩人、館柳湾(二三一―二四四)を取り上げ、その漢詩を通して、一人の文人が煎茶をどのようにとらえて、煎茶に何を求めたのかを明らかにしていきたい。

柳湾が編んだ『咏茶詩録』は、その跋文によれば柳湾が「閑窓に歴代名人の詠茶詩を手録せし」もので、その内容は「唐宋元明人の詩什凡そ二百六十首」(長谷川瀟々居著『煎

茶志』)からなる詠茶詩集である。柳湾が、詠茶詩をこのように丹念に集めたということから、柳湾が煎茶を嗜み、煎茶を漢詩に詠んだであろうことは容易に推測できる。そこで今回の研究対象として柳湾の詩を取り上げることにした。

【研究方法と考察】柳湾の漢詩は『柳湾漁唱』一集二集三集、『柳湾遺稿』、『小籟吟藁』に収められ、その数約七〇〇首。この中から、「茶」または「茗」の字を含む漢詩を中心に、煎茶に関わりがあると思われる漢詩四十八首を選び、その中から柳湾が煎茶をどのようにとらえ、煎茶に何を求めていたのかを、清の陳元輔著『茶略』の得趣篇と比較しながら考察した。その結果、次の二点が明らかになった。

その第一点は、柳湾は煎茶を喫することと漢詩を詠むことは不可分であると考えていることである。盧仝が「茶歌」を作って以来、文人は詩人であると同時に茶人でもあり、したがって、煎茶は詩と分かちがたい関係にあるという意識が広まった。柳湾の詩にもそれが明確にあらわれている。

第二点は、柳湾は煎茶を通して趣のある空間の中に身を置き、物理的、さらには精神的空間を「清」にしようとしたことである。古来、

文人が考えてきたように、柳湾も、茶が「清」を生み出すと考えていることは、その詩のあらわれにみえてくる。

【結論】煎茶を喫するのは何のためか。それは煎茶を通して日常生活に趣を得て、「清」つまり去俗の生き方をするためである。多くの文人がこのような「清」の精神生活に憧れ、そのような人生を送ろうとして、煎茶と向き合ってきた。けれども、それが、生涯を通して実現した例は決して多くない。柳湾は、「清」を尊ぶ文人として生きることができた資質、家庭環境や社会環境を得て、煎茶によって実際に「清」の生涯を実現したい良い例であるといえよう。

茶の品種育成と普及動向

中村 順 行

日本における茶の品種は明治時代に始まるが、当初は品種が育成されても効率的な増殖方法がなく、これらの品種が広く普及し始めるのは挿し木繁殖技術の確立以後になる。挿し木繁殖技術の普及は第二次大戦後であり、品種普及率も昭和二十九年の2.8%から現在の93.6%にと、ほぼ半世紀をかけた在来茶園から優良茶園に一変してきた。特に、昭和四十年から五十年にかけては、幅広い需要に性品種の育成などを中心とし、幅広い需要に応えることのできる品種の育成と速やかな普及が重要となっていた。

『小堀遠州茶会記集成』に見る遠州の茶花

横内 茂

平成八年、小堀宗慶氏編になる『小堀遠州茶会記集成』が出版されたことで、主に小堀遠州四十七歳から六十九歳までの二十一年間に行なわれた約三百九十回にも登る茶会記が、時間を追って一覧出来るようになったことは、誠にありがたい。

演者らは、本書に記録された茶会記の中から、遠州が使用した茶花にスポットを当てて分析を試みた。この結果、茶花としての植物名が記録されている約二百六十会から、およそ四十五種が茶花に使用された植物として同定されたが、二種については種名を明らかにし得なかった。

当時の会記が一般にそうであるように、本書においても炉の季節が中心に記録が残されている感がある。いずれにしても炉の植物としては、スイセン Narcissus 'Taetta'、ウメ Prunus Mume、シバキ Camellia japonica の三種の使用頻度が高くなる。また風炉の植

年から五十年代にかけては、好況時における大型機械による茶園の新改植や茶工場の大規模化、さらには国内消費量の増大などに伴い加度的に優良品種が導入された。

しかしながら、優良品種が普及されたとはいえ、その内の94.7%(平九)を「やぶきた」が占め、ほぼ寡占状態となっている。この「やぶきた」は、「品種」「挿し木発根性」「広域適応性」等々に多くの優良点を持っているが、あまりにも偏重化しすぎたが故に各種の弊害も露呈している。特に、収穫時期の集中化、加工施設への投資効率の悪化や規模拡大の困難性。嗜好の多様化に逆行。病害の多発化。等々が生じ、静岡県では昭和五十一年より「やぶきた」偏重対策を講じている。

さらに、最近では生産性が高く、需要拡大が望め、「嗜好の多様化」「健康・安全性」に求められる品種の普及も望まれている。これまでも、社会経済的要求から紅茶用品種の育成、玉露・てん茶・玉緑茶などの茶種に適した品種、あるいは暖地・寒冷地向き品種など八十七品種(農林登録品種47、府県育成品種24、民間育成品種16)が育成されてきたが、せん茶用品種は「やぶきた」を片親としたものも多く、その変異幅は狭い。



却し、各種の香味をもった品種を育成する必要がある。さらに、多収性・高品質にも増して機能性成分に富んだお茶。省力化、低コスト化の図れる機械化適応性品種。環境保全型農業を推進するための少肥型品種・耐病虫

物では、ハス *Nelumbo nucifera* やコウホネ *Nuphar japonica* の使用頻度が高く、こうした現象は当時の一般的な傾向といえる。しかし遠州の茶花の創意は、次の植物に明らかに認められよう。すなわち、フクジュソウ *Adonis amurensis*、遠州が茶花に導入、定着させた。ツバキの栽培品種「日野椿」など若干ではあるが、栽培品種名の明らかかなものを使用するようになった。カンボタン *Paeonia suffruticosa f. hienalis*、使用頻度は低いが、本品種と推定される使用例が見い出され、茶花の使用度はもとより、園芸史上においても特記すべき記録といえる。グンドク *Canna indica var. orientalis*、本品種と推定される植物名が見い出され、インドシナ半島など亜熱帯の原産で特殊な栽培を必要とするものであった。サザンカ *C. Sasangua* 好んで使用し、茶花に定着させた。

以上、遠州の茶花の特徴ともいえる植物を上げたが、これらの背景に存在する植物、園芸的な問題を中心に「遠州の茶花」について論述する。また演者らは、茶花の使用頻度について新たに絶対比数を求める方法をとった。この点も合わせて紹介する。

る場合には水上のコース)に従って行なわれること、厳密には一巡することによって庭園の鑑賞と利用が全うされるものであり、「その機能の面から露地に発展と密接な関係」があり、「それが伝統的な池庭と融合し、さらに枯山水的な部分もとりいれられ、総合化された、いわばそれまでの日本庭園の様式を集大成したもの」と解説されている。

白幡洋三郎氏は大名庭園について、その成立には桂離宮に代表される寛永年間の京都の公家の庭園が深く関与していたと指摘した。それは秀忠の時代、いわゆる「数寄の御成」という形式が常態化し、そのため大名の屋敷には茶室・茶庭を設けることが必要になったからであり、このとき桂離宮や修学院離宮など既に成立していた院や公家の離宮がとりいれられたもの、と推定した。つまり、近世初頭における廻遊式庭園成立の過程を辿るキーワードの一つは茶の湯であった、といえる。

しかし、一見同じ様式に見える禁中・公家の庭園と武家の庭園とにおいて、少なくとも近世初頭では茶の湯のありかたは大きく異なっていた。廻遊式庭園の空間構成の系譜を明らかにするには、両者の茶の湯と空間構成の系譜を辿ることが不可欠である。

美濃古窯文書に見る桃山・江戸の茶陶

伊藤 嘉章

美濃古窯文書は、昭和初年以降の美濃古窯研究の中で注目され、以降、多くの紹介、研究が行なわれている。今回は、特に由緒書を中心とした。これに、美濃古窯文書以外の文献、考古学研究、茶道史研究の諸成果をあわせ検討を行なった。

由緒書は、窯の由緒を記すものである。美濃では、十七世紀中葉以降多く作られ、その内容にはある種の共通点がある。

そこで常に語られるのは、工人の移動の問題である。これについては、先学の指摘にあるとおり、常に瀬戸との関わりが重視されているということが確認された。

由緒書には、作品についての記載は稀である。桃山期の茶陶に関連する記述も多くないが、複数の由緒書の中で、久尻窯の加藤景延による白薬手茶碗の天皇への献上と、筑後守受領についての言及が見られる。

現在、考古学研究で、志野の出現を十六世紀末とする説が有力である。白薬手茶碗献上は、慶長二年(一五七)筑後守受領の記事とあわせ、志野出現期を考える上で重要であろう。江戸期の茶陶についても、直接的な記載は

あまりない。その一方で、由緒書を通して、瀬戸茶入に対する高い評価が語られる。そして、茶入を作った人脈としての瀬戸・美濃陶工観が語られていることが重要であろう。

そこから由緒書の記載の根底には、新たに高い評価を与えられた瀬戸茶入を中心とする江戸期の茶陶の価値観があると言えよう。ここで、瀬戸に残された文書の中の美濃から瀬戸への工人の移動にも注目する必要がある。尾張藩の清洲越えの時期に美濃から招聘された陶工は、美濃窯で桃山茶陶の生産を殆ど行なっていない美濃窯東南部の陶工であった。

この地域、中馬街道系窯は、久尻元屋敷窯を中心とする織部生産を行なった地域とは、大きく生産内容を異にする。織部生産の衰退の時期に、天目・茶壺・茶入といった鉄釉茶陶の生産地として隆盛を迎える地域であった。

近世初頭の数寄屋と庭園

一 廻遊式庭園の成立に関する一考察

仲 隆 裕

一、廻遊式庭園と茶の湯

廻遊式(回遊式)庭園とは、「庭園の鑑賞や園内の建物の利用が、設定された園路(あるいは)御茶屋間を結ぶ飛石はみられず、当時武家において好まれていた露地の様式が否定されていたといつてよい。この後水尾上皇の姿勢は、寛文二年(一六六)十月十八日、修学院離宮における茶事とその空間においても窺うことができる。

ところで禁中における喫茶の系譜を辿れば、その嚆矢は弘仁六年(八二五)嵯峨天皇の韓崎行幸における梵釈寺での喫茶があげられよう。このとき、詩宴がおこなわれ、琵琶湖で舟上での歌舞があり、さらに喫茶が行なわれたという(『日本後記』弘仁六年四月二十二日条)。白川天皇の大堰川行幸、後小松天皇の北山殿における三船御会、後花園天皇の室町殿における三船御会などにみられるように、宮中の儀典に舟遊が組み込まれることはひとつの伝統であったと考えられる。後水尾院の茶の湯と空間構成の背後には、禁中をその支配下に置こうとする武家への反発があり、禁中の喫茶の伝統を継ごうとする姿勢があったものと推察される。

やがて禁中・公家の茶の湯とその空間にも、「世間茶」と呼ばれる武家の茶の湯の影響が現れる。この点については機を改めて報告したい。

近畿例会

平成十年度第四回の京都例会は十二月十二日(土)午後六時三十分より、京大会場に行われた。参加者は約四十名。概要は左の通り。

シンポジウム「発掘庭園めぐって」

尼崎博正氏 仲 隆裕氏
稲垣正宏氏

戸田勝久理事の総合同会により始められ、倉澤副会長の挨拶ののち、ただちにシンポジウムに移った。

まず尼崎博正氏より、日本国内の発掘庭園の状況と出土遺構・出土品から何がわかってきたか、手短な報告がなされた。

次に仲 隆裕氏から奈良国立文化財研究所編『発掘庭園資料』の内容を中心とした、日本中世の庭園遺蹟の紹介が、スライド映写を交え行われた。鎌倉初期の「永福寺庭園」から「江馬氏館跡庭園」「東氏館跡庭園」「慈照寺庭園」「平安京左京三条三坊十三町庭園遺構」(下層)、「一乗谷朝倉氏遺蹟義景館跡庭園」「大内氏館跡庭園」「吉川元春館跡庭園」「万

徳院跡庭園」まで、九例の庭園遺蹟の発掘状況や出土遺物について解りやすく説明を受けた。また戦国大名の庭園に一定度の法則性が見られること、洛中洛外屏風に見られる管領細川氏邸の庭との共通性など興味深い指摘をされた。

次いで稲垣正宏氏より、茶室・露地に関する検出遺構と茶陶についての報告があった。

氏は主に環境濠都市遺蹟での出土遺構・出土品をスライド映写によってわかり易く解説され、「炬壇を持つ建物」「庭園遺構」などの事例を紹介された。更に大坂城・肥前名護屋城における最近の発掘成果についても言及され、茶の湯の遺構が続々と発掘され、それぞれが学術的にも価値が高く、今後も研究の深化が望まれることをあわせて報告された。

報告終了後、質疑応答に移ったが、残り時間が少なく、日本庭園における州浜のもつ意味、一乗谷朝倉氏遺蹟の「花壇」の真偽など興味深い質疑が提出されたが、詳しい検討は今後に譲ることになった。

東京例会

一九九八年九月二十六日(土)
「八田円斎の技」

武内 範 男

畠山記念館では、開館以来館蔵品による茶道具の取合せの展示を主に開催してきた。また同時に、近代茶道具史において今迄取り上げられることのなかった茶人や職方に注目し、小規模ながら併設展示も行なっている。

平成六年「陶工 大野鈍阿の技」、同八年「女流茶人 堀越宗圓」、そして十年には、「茶の匠 八田円斎」と続き、今後この路線での企画を考えている。

従来、八田円斎について茶道関係図書に収められたものには見当らず、わずかに『角川茶道大事典』において、熊倉勲夫氏が人名の項目に執筆されたほどである。茶道史においてこの分野での研究の遅れ、未発掘の状況であることが痛感されよう。

発表では、八田円斎の略伝と指物及び陶器の作風について不十分ながら触れてみた。また、参考のためその作品を会員諸氏に御覧いただいた。

八田円斎(一六三二—一七二五)は、本名富三郎、茶道指物師八田太郎吉の次男として金沢に生まれた。幼少より茶の湯に親しんだが、東京に転居してからは、在住の妻千家元円能斎に茶を学んだ。家元を支援、尽力し「円斎」

近代茶道具史の側面での役割は、高く評価されねばならないだろう。(畠山記念館)

一九九八年十一月二十八日(土)

「三井家の茶道具」

「茶道具に見る近世の三井家と茶の湯との関わり―創業期から発展期を中心に―」

清水 実

三井家の創業は伊勢松坂出身の三井高利が延宝元年(一七二二)に江戸本町に呉服店を開き、京都に仕入店を設けた時とされる。のちに駿河町に移り両替店を新設した。元禄年間までに幕府の呉服御用と為替御用を拝命して江戸・京都・大阪の三都に大店を構え、当主達は京都に居住した。

一方、高利の長兄俊次は、寛永年間には江戸本町に小間物・呉服の店を構え、京都に仕入店を持って居住し成功を収めていた。高利一家はこの兄の店で商売を身につけたのである。俊次は邸内に能舞台をもつほどの豪邸を構えた。しかし一人息子の俊近と、養子で高利の甥六右衛門は、数奇に凝って風流三昧の生活を送ったため、家業は傾き没落への道を辿った。

高利は、この兄の家を反面教師とし、没後

は財産を分割せず兄弟一致して事業を共同経営することを遺言した。それをもとに二代高平(法名宗竺)は、享保年間に家法「宗竺遺書」をまとめた。また三代高房は、父高平の「話をもとに『町人考見録』をまとめ、没落町人の実例を挙げて、危険な投資、驕り高ぶり、遊芸への耽溺を戒めている。このように、従来の高利像は商売一筋の創業者というイメージがあり、また、二代高平や三代高房にしても、茶の湯には無縁のように考えられていた。しかし、伝来の茶道具は早くから茶の湯が家族中で嗜まれていたことを示している。

三井家の事業は、元文年間が呉服店・両替店ともに江戸時代を通じて最高の営業収益を上げた時期であった。その頃から各三井家では茶道具の名器蒐集が始まっている。また、名物には貸付金の担保として入ったものがあり、茶道具は数寄の道具であると同時に、換金性の高い財産としての側面もあった。

高平晩年の隠居宅には、二畳台目の茶室や十五畳の書院などが建てられていた。高房は享保年間に寛々斎の高弟服部道円から真台子の相伝を受け、以来表千家との関係が親密になる。如心斎の時代には七事式の成立に関与する当主もあらわれ、表千家の大旦那として

の号を授けられている。円斎は道具店の経営、茶の湯教授を通じて、井上世外、石黒況翁、根津青山、馬越化生などの数寄者、仰木魯堂、栗山善四郎、山澄宗澄ら茶道関係者とも交流を持った。高橋帚庵著『東都茶会記』、『大正茶道記』には、円斎の茶人としての評価が余す所なく詳述されている。

円斎は家業を継承し、棚物・煙草盆・茶箱・炬縁をはじめ、花入や茶杓も製作、その領域はすこぶる広い。桐・桑・杉などの素材を十分に生かし、要所に透かし彫りを施すなど、その技量を如何なく発揮、瀟洒な江戸風の作品を数多く残している。

円斎の名を高らしめているのは、指物よりも茶陶の製作であろう。最初は郷里の金沢より陶工を呼び寄せ、九谷焼や大樋焼を指導、また自らもこれに携わり、工房を形成していった。伊万里・金襴手・銀襴手・祥瑞・染付など広範囲にわたるが、なかでも仁清写しは最も得意とするところで、写しの水準を越えて完成度の高い芸術品となっている。

「金沢利斎」「今仁清」と呼称された技は、天分にもよるが、数寄者や茶人達との交際の賜で、また円斎もそれに報答するように諸作品を誕生させた。

京都の町人文化の一翼を担って行く。それは千家の家元制度の発展とリンクしたものであった。また、六代高祐たかすけのような数寄大名との交流を持つほどの人物も出た。

しかし、近世三井家の当主たちは、「宗竺遺書」という家法に規制され続けた。あくまでも家業の存続が大前提で、家法に背くものは当主といえども義絶され排除された。町人の遊芸は家業あつての遊芸で、商人としての範を越えないところで主として隠居後に嗜むのが旦那たるものの遊芸であつた。三井家の主人達はそのような旦那衆の茶の湯を体現した典型的な豪商であつたといえよう。

(三井文庫)



日時 平成十一年二月二十一日(日)
会場 京大 会館

京都市左京区吉田河原町十五の九
電話 〇七五―七五一―八三二一

次第

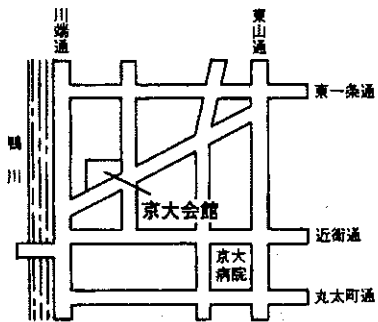
受付 十三時より
開会挨拶 十三時三十分

研究発表

- 1 大槻幹郎氏
「黄檗と煎茶」―月潭道澄を中心にして―
- 2 松下 智氏
「雲南省南部の喫茶習俗」
―茶の文化形成をめぐって―

参加費 会員五百円 非会員千円

会場略図(京大会館)



京大会館

〒606 京都市左京区吉田河原町15-9
TEL (075) 751-8311(代)
FAX (075) 761-5403



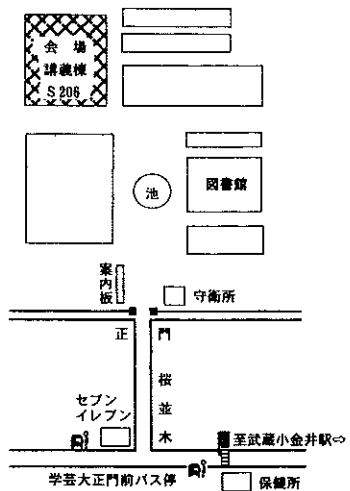
東京例会

東京例会は東京学芸大学(小金井)を会場に行なわれる予定です。

平成十一年

- *一月三十日(土) 午後二時より
講義棟S二〇八
「山上宗二記について」
渡辺 誠一氏(明治大学)
- *三月二十七日(土) 午後二時より
講義棟新三号館三二八
「細川三斎の強き茶の湯」
矢部 誠一郎氏(玉川大学)

会場略図(東京学芸大)



○会報十九号巻頭の「正伝院(織田有楽)と水源庵(細川頼有)」をお願い致しました正伝水源院真神仁宏ご住職のお名前ふりがなに誤りがありました。お詫びして訂正させていただきます。
(正) 真神仁宏↑ (誤) 真神仁宏